- 5 β -ナフチルアセテートを利用した食品中への昆虫類の混入時間の推定
○大町俊司・谷川 力 (イカリ消毒株式会社)
Presumption of the mixing time of the insect in the food using β -naphthylacetate
Ohmachi S. and Tanikawa T.

食品や飲料等へ昆虫類が異物混入として発見された時、その昆虫異物が加熱行程を経ているか否かの判断材料として、カタラーゼによる発泡の有無による結果を利用することが多い。また、その発泡量は時間経過、食品や飲料類の種類によって大きく異なることも知られている。

一方、 β -ナフチルアセテートは、有機リン抵抗性有無の判断基準として使用されている。

今回、この β -ナフチルアセテートを利用し、昆虫類の食品への異物混入時の加熱の有無および時間の推測を試みた結果について報告する。

試験に使用したイエバエでは、死亡直後、翌日、3日後、1週間後、1ヶ月後および3ヶ月後について、チャバネゴキブリでは死亡直後、1週間後、1ヶ月後、3ヶ月後および6ヶ月後について発色の状況を確認したところ、時間経過とともに発色が薄くなる傾向が見られた。また、加熱行程を経るとそれらは発色しないことが明らかとなった。

- 7 ツルグレン法を用いた室内塵からのダニ捕集の試み
亀井昭夫、野田桂子 (横浜市青葉福祉保健センター)、鎌田誠 (横浜市中福祉保健センター)、佐藤良明 (横浜市南福祉保健センター)、関根厚司 (横浜市港南福祉保健センター)、小菅皇夫 (横浜市緑福祉保健センター)、小曾根恵子、金山彰宏 (横浜市衛生研究所)

Trial isolation of house dust mites with the Tullgren method

Kamei A., Noda K., Kamata M., Satoh Y., Sekine K., Kosuge K., Kosone K. and Kanayama A.

室内塵からダニを採集するためには遠心沈殿法、比重法、浮遊法、ベルレーゼ法など、また、生きたダニを捕集する簡便法としてプレパレート・トラップ法が考案されている。しかし、これらの方法には一長一短があり、検査目的によって使い分ける必要がある。行政指導の現場においては、刺咬被害が疑われる場合等に、掃除機のゴミ等から簡便に生きたダニ類を確認する必要に迫られる機会が多い。

今回、ツルグレン法を用いて掃除機のゴミからのダニ捕集を試みたのでその結果を報告する。また、遠心沈殿法の一法であるダーリング液遠沈法との比較も行った。

- 6 サシガメの卵寄生蜂二種の放飼実験
金山彰宏、小曾根恵子 (横浜市衛生研究所・医動物)
Liberation experiments of two egg parasites of assassin bug
Kanayama A. and Kosone K.

Triatoma dimidiata と *Rhodnius prolixus* のサシガメ二種は、グアテマラ共和国における主要なシャーガス病媒介種である。これらのサシガメには数多くの天敵が存在するが、なかでもサシガメの卵に寄生するクロタマゴバチ科の *Telenomus fariai* とトビコバチ科の *Ooencyrtus venatorius* は、代表的な卵寄生蜂として中南米に広く分布する。

今回は、寄生蜂二種の分散習性を確認するため、実験室において放飼を行った。

T. fariai, *O. venatorius* いずれも、放置した卵に対する寄生率は低かったが、明るい窓際に放置した卵への寄生率は高く、強い走光性を示した。

寄生された卵からの羽化個体数は正常で、特に変化はみられなかった。

- 8 エキゾチックペットに寄生した数種外部寄生虫に対するイミダクロプリドの治療効果
藪野晋吉(エキゾチックペットクリニック)・香川尚徳(バイエル株式会社)・○佐伯英治(サエキベテリナリィ・サイエンス、麻布大)
Efficacy of imidacloprid against some kinds of ectoparasites in naturally acquired exotic pet animals
Tsuruno S., Kagawa T. and Saeki H.

5 種エキゾチックペットに自然感染した外部寄生虫に対するイミダクロプリド(以下 IC と略)の使用経験例を報告する。ノミが寄生したウサギ 12 頭について、IC を 1 頭あたり 12.7~40.0mg/kg あて滴下投与したところ、その後の経過観察が可能であった 8 頭全頭において、4 段階評価上位第 2 位である有効、あるいはそれ以上の成績が得られた。一方、カビアハジラミが寄生したモルモット 15 頭に対して、IC を 28.2~80.0mg/kg で投与した結果、追跡が可能な 13 頭ではいずれも著効と判定された。1 症例のみではあるが、モルモットズツキダニに対する IC の駆虫効果も窺われた。フェレットではノミ寄生の 2 症例で IC の有効性が確認された。これらすべての症例で、IC 投与による副作用は認められなかった。きわめて少数例ではあるが、プレーリードッグとモモンガの症例も紹介する。